經濟論叢

第八十三巻　第二號

シュンペーター帝国主義論への補説
……静　田　均　1

急速税務減価償却と所得税の期間配分
……高　寺　貞　男　21

ロビンソンの資本蓄積観……入　江　正　39

林業労働の存在形態……林業労働研究班　52

昭和三十四年二月

京都大學經濟學會

シュンペーター帝国主義論への補説

静田　均

一

シュンペーターは一九一三年から一四年にかけ、交換教授としてアメリカにわたり、コロンビア大学の教壇にたった。そして祖国オーストリアに帰ると、まもなく第一次大戦が勃発した。戦争が終った翌年の一九一九年三月、オットー・バウエルの推薦によって社会民主党のカール・レンナーを首班とする連立内閣の大蔵大臣に就任、戦後の多難なる財政問題と取組んだが、わずか七カ月の短期間で職を退くのやむなきにいたった。

シュンペーターの帝国主義に関する論文は、一九一九年に発表されたとはいえ、すでに戦時中に書きあげられていたもののようである。この点に関するかぎり、学者のあいだに異論はない（ハーバラー、ハイマン）。第一次大戦中、シュンペーターはどんな態度をとったであろうか。ハーバラーはシュンペーターに関する追憶の中で書いている。『彼は自分の平和主義的・親西欧的（とくに親英的）・反ドイツ的な態度をかくそうとはしなかった』（S. E. Harris, *Schumpeter, Social Scientist.* 1951 p. 30　坂本二郎訳『社会科学者シュムペーター』昭和三〇年、九二ページ）と。そればかりではない。ハーバラーはわざわざ脚註を加えて、『この態度は「帝国主義の社会学」において最も明瞭に示されている』と記している。シュンペーターがすぐれて平和主義的であり、生涯を通じてその態度をかえなかったこと

は、あまねく人の知るところである。問題はむしろ彼がとくに親英的であり、かつ反ドイツ的であったということ、そしてそれが論文のうちに鮮かに投影しているということにあるであろう。たしかにシュンペーターの論文が親英的な調子で貫かれていることは、首肯できる。しかし、反ドイツ的な論調が滲みでているかどうかは疑わしい。少くとも露骨に反ドイツ的とおもわれる箇所を、わたしは見出すことができない。

第一次大戦のさいちゅうアメリカでは、ウェブレンの『ドイツ帝国と産業革命』(*Imperial Germany and the Industrial Revolution*, 1915) が刊行された。この書物は旧ドイツ帝国が産業革命の洗礼をうけて資本主義への途を進みながらも、なおかつ前期的な遺制を清算することの困難であったことを説き、ドイツ帝国主義の分析に新しい光をあてたものとして、知られており、後年におけるナチスの擡頭と没落を予言したという意味で、注目すべき労作とされているが、E・ハイマンはウェブレンとシュンペーターとの間に平行関係のあることを指摘し、動機においても、立論においても相等しいことを強調してやまない。換言すれば、好戦癖はブルジョア社会の性格と相いれぬものであること、過去の社会形態に見られる好戦的態度の残滓がのこっていても、それは漸をおうて衰え、ブルジョア的精神の勝利によって、つまり軍部に対する民間人の勝利によって克服されることを論証しようとするかぎり、両者はその揆を一にする。ただ異るところは、ウェブレンが反独的であるのにひきかえて、シュンペーターは親英的であるだけだというのである (E. Heimann, Zur Ökonomie und Soziologie des Imperialismus, in "*Wirtschaftssysteme und Gesellschaftssysteme*". 1954, S. 180)。

発表の年次からすれば、シュンペーターの方がウェブレンより遅いけれども、ウェブレンの影響をうけたかどうかは明かでない。戦時中であってみれば、敵対国のあいだに文化交流はおそらく行われなかったであろう。ドイツ

とオーストリアは盟邦の間柄であった。そういう事実に対する特別な顧慮が、意識的にか無意識的にかシュンペーターに一種の牽制を加えたと考えられぬこともあるまい。とにかくシュンペーターの論文はドイツについて不思議なほど触れるところがない。もし彼が一歩を進めて、第一次大戦の契機となった一八九〇年以降におけるドイツ帝国主義の勃興について分析を加えたとしたら、彼の業績はさらに輝しい光彩を放ったことであろう。それが見出されぬことは、惜みてもなお餘りあることといわねばならない。

二

シュンペーターはどのようにイギリスびいきであるのであろうか。彼がイギリス政治史の分析にかなりのページをさき、かつそれを反帝国主義の展開として捉えている事実は、たしかに注目されてよい。主論文の第二節『標語としての帝国主義』の叙述を見よ。シュンペーターの面目まことに躍如たるものがある。

遠い昔には、イギリスでも他の国々と同じように帝国主義的傾向が存在していた。シュンペーターはこれを歴史的事実として認める。しかしその後はむしろ反帝国主義的感情が次第に発展し、十九世紀を通じてイギリス政治史の基調をなした、と彼は主張するのである。そういう変化はいつ起ったのか。またなぜ起ったのか。これこそ、われわれのあずかり聞かんと欲する問題でなければならぬ。シュンペーターは答える。変化が起りはじめたのは、『民衆と国王との間の闘争が、ヨーロッパ大陸におけるとは異った仕方で、すなわち民衆の勝利として終末をつげた時からである』（第二節）。

チュードル朝やスチュアート朝のもとにおいては、イギリスでも絶対君主制が栄えていた。そしてもしそれが栄

えつづけたとしたら、おそらく『専横的な武力的絶対主義が勃興し、……不断の侵略戦争に導いたであろう』(同上)。ところが、とシュンペーターはいうのである。国王とその一味のものが敗北を喫したことは、歴史の歩みに決定的な分岐点をつくった。チャールス一世の悲劇的末路、クロンウェルの登場、王政復古、一六八八年の名誉革命という一系列の事件をへて、イギリスはひたすら自由にむかって進んだ。最初のうち自由は支配階級だけの占有物であったが、支配階級といえども選挙権者の支持を必要としたから、世論をまったく無視するわけにはいかなかった。そしてこのことは、イギリスの対外政策をヨーロッパ大陸のそれと異ったものにした原因である。国王や廷臣たちが政策の決定について完全に無力ではなかったにせよ、対外政策にかんする手続を秘密にこっそり済ますことは不可能となり、国会と世論の審判をうける結果を招いだ。かくて『対外政策は政党政治の重要な要素となり、政治上の影響力をもつ民衆の関心事となった』(同上)。もちろん政党は複数であり、政権の交替によって外交方針も変化することはしたが、しかしすべての政党のあいだでつねに意見の合致する点がただ一つあった、とシュンペーターは強調する。それはほかでもない。『職業的軍隊の形成を防止し、それの形成が避けがたくなったときは、それをできるだけ小規模のものにし、それが独立の権力と特殊の利害関係とをもった別格の職分階級となることのないようにする』(同上)ということである。その結果、『絶えず侵略に駆りたてるような要因』(同上)が取りのぞかれるような情勢を馴致した。

シュンペーターはいう、『われわれは新時代の出発点において、すでにこのことを看取することができる。平和そのものを主眼とした政党がただちに形成され、その時いらい侵略政策をおさえるブレーキの役割を果たしつづけた』(同上)と。ほんとうにそういいきれるであろうか。われわれは疑問をもつが、なおしばらくシュンペーター

のあとを趁うことにしよう。歴史の示すところによると、イギリスにおける最初の政党は、トーリー党とホイッグ党であった。トーリー党は僧侶・小地主・自作農・借地農の政党であり、欧洲介入政策や海外での係争に対して全く興味をもたず、国内問題わけても租税問題に関心をもった。これに比べると、ホイッグの方は大貴族・ブルジョアによって結成されており、遙かに好戦的であった。

ともあれ、シュンペーターはこれに関連して三つの問題点を指摘する。第一、当時にあっては、植民地保有は今日におけるよりも遙かに多くの実質的利益をもっていた。戦争はまだ儲る仕事であった。第二、ホイッグ党はフランスの明白な攻撃的意図に対抗して、彼等が獲得したばかりの自由とそれに伴う彼等自身の地位を守る必要があった。第三、全世界にわたって存在した国家的拠点を確保することをホイッグの任務とした。もっともシュンペーターの但し書によると、この拠点は『イギリス国家が国家として略取したというよりイギリス国民が個人的に略取した』（同上）ものであるが。

さて右に掲げた問題点について、シュンペーターはみずからの見解を述べる。第一のものは、あらゆる好戦的傾向のもととなるようなものであり、また当時の戦争には商業戦争の要素もありはしたが、それを単なる商業戦争と見なすことは、史実に反する。のみならず、『植民地帝国を築きあげたのは、イギリス国家ではなかった。国家はおおむねすでに植民地が出来上ってから、否応なしに保護者の役割を押しつけられた形であった』（同上）。さりとてイギリス帝国ぜんたいを築いたのは、『民衆』の力だということもできない。むしろ型通りの一旗組や本国を追われた連中の荒稼ぎであって、彼等はイギリス国民の大多数から袖にされていた手あいであった。第二、革命政府下のフランスに対するイギリスの態度は、部分的には戦利品めあてであったといえるけれども、ほんとうのところ

は、小ピットの政治の性格が語っているように、イギリスの抱負は平和であり、自由貿易であり、マーカンチリズムの解体であった。したがって革命時代やナポレオン時代のフランスに対するイギリスの態度は、帝国主義的発展線上の一段階として理解さるべきではなく、それ以前の自由主義的趨勢からの一時的逸脱として理解さるべきものである。

『以上に述べた二つの事情に照し合せてみると』、とシュンペーターは書いている。『われわれが帝国主義という言葉を用いている意味において、一八世紀のイギリス帝国ということをいってよいかどうか、疑わしくなる。かりにそれを帝国主義と呼ぶとしても、ヨーロッパ大陸の帝国主義とは全然ちがった種類のものであった。スペインの場合と同じように、イギリスは最初は単にフランスに対して自己防衛をしただけである。もっとも、この防衛は成功しすぎて、逆に征服に転じたのであったが』（同上）。いわば食べるにつれて食慾が出たというものであろう、とシュンペーターは説くのだが、しかし帝国主義の本質的メルクマールが無目的、無際限の膨脹にあるものとすれば、最初は防衛的であっても、後になって攻勢に転ずるかぎり、問題はないはずである。やはり帝国主義の中にかぞえらるべきであろう。

三

一九世紀後半のイギリス政治史は、自由党と保守党の対立抗争の歴史である。それは簡単にいえば、グラットストーンとディスレリーの一騎打ちであったといってもよい。グラットストーンによってつねに押されぎみであったディスレリーは、一八七四年の選挙対策として『帝国連合』という目新しいスローガンを掲げたが、実のところそ

れは全く苦肉の策であった。一九五二年ごろのディスレリーは植民地を厄介物あつかいにしていたのだが、いまやうって変ったように植民地をば『統一的帝国の中の自主性をもった一員』とするといいだしたのである。植民地と英本国を結ぶ関税同盟、共同防衛組織をつくろうとする彼の構想は、自由党的なコスモポリタニズムを排撃し、国民感情に訴えて党勢を拡張しようとする狙いをもっていた。しかしシュンペーターによれば、この計画そのものは、帝国の国境をこえて外部に進出するような内在的傾向をもつものではなく、帝国の維持ということを念願するにとどまっていた。そのかぎりにおいて、『国内政策のための標語』以上に出るものではない。

ディスレリーが主張した帝国主義が単なる標語でしかないということは、彼がそれを提唱したにかかわらず、また実行に移そうとおもえば、移せそうな情勢であったにかかわらず、さらにそれを試みようとしなかったという事実に徴して明かである。ディスレリーの遺鉢は鬼才チェンバレンによって引き継がれた。しかしチェンバレンのあらゆる努力にもかかわらず、結果は『軍国主義の完全な無力』を実証したにすぎなかった、とシュンペーターは説く。ここでわれわれのやや意外におもうのは、帝国主義がいつの間にか軍国主義にすりかえられているという事実である。

要するにシュンペーターによれば、一九世紀から二〇世紀にかけてのイギリス外交政策の基調は、平和主義的であり、国家の重大な利益がほんとうに危いか、直接の脅威にさらされるかという場合でないかぎり、できるだけ対外干渉をさけ、イギリスの勢力圏として残る分野を維持しようとした、とシュンペーターは説くのである。しかしアヘン戦争はどうか。スエズ運河はどうか。ブーア戦争はどうか。イギリスの外交政策は抜け目のない実利主義と機会主義の典型ではないか。そしてそれは同時に帝国主義的膨脹を意味するものではないか。おそらく読者はたた

みかけて質問を連発したい衝動に駆られることであろう。しかし待て。シュンペーターは歴史の基本的潮流とそれを妨げる一時的反動とを区別し、ピールからグレーにいたるまで大勢は動かなかった、と考えるのだ。『最近の年代に』、と彼は書いている、『イギリスの社会進化の本島にうちよせていた帝国主義の波は、この進化の真の奥底から起ったものではなく、むしろ政治的感情の一時的反動ないしは受身にたった個々の利益の反撥を現したものと見るべきである。』『攻撃的なナショナリズムないし遠い昔から今日まで生きながらえてきている支配や戦争の本能などというものは、一朝にして亡びるものではない。それらはしばしば勢力をもりかえそうとするし、社会共同体の内部でおのれが満されることが少くなればなるほど、いっそう活気づいて勢力の挽回をはかるのである。けれどもイギリスにおけるように、この種の傾向に力をかすにたる強力な利益集団がなく、また社会組織の構造のなかに交戦的要素が欠けている場合には、これらのものは政治的に無力とならざるをえない』(同上、傍点は引用者)。

われわれはここで、またしてもシュンペーターの個性的な物の見方にでくわす、――それはけっして万人を説得するだけの力をもつわけではないが、ユニークだという点ではたしかに群を抜いている、といえよう。実のところシュンペーターにとっては、実践としての帝国主義のみが研究のテーマなのであって、単なる標語としての帝国主義はほんらい研究の対象たるに値しないはずのものであった。しかし帝国主義は、資本主義や民主主義と本質的に相いれぬものだという信念を、彼はイギリスの歴史を通して立証したかったのであろう。それにしても親英的な、あまりに親英的な彼の論調が、時として強い反撥を催さしめることは否定しがたい。ハイマンは卒直に苦言を呈していう、『これは驚くべき歴史である』(E. Heimann, *Ibid.* p. 181.)と。

四

ともあれ親英的かどうかは、われわれにとってそれほど重要な問題ではない。わたしはむしろ別の方面に問題を切りかえたいとおもう。第一は単なる標語としての帝国主義ではなく、時代思潮としての帝国主義についてである。またその基盤もしくは背景としての経済の変化についてである。

一八五〇年から一八七三年にいたる二十数年間は、イギリス資本主義が繁栄の絶頂に達した時期であり、世界経済においてまさしくヘゲモニーを握っていた。イギリスは工業においても、海運業においても、貿易においても、金融においても圧倒的な優位をしめ、他の国の追随を許さなかった。七つの海を支配するイギリス海軍の威力は自国の権益を守るに十分であった。植民地分離論と自由貿易論が一世を風靡したのも、けっして偶然ではない。しかし七三年恐慌のあと長期の景気沈滞がおとずれると共に、イギリス資本主義の前途には一抹の暗雲が浮びはじめ、輸出不振、操業短縮、失業増加など容易ならぬ兆候は、財界ならびに政界の憂色を深めた。かくて一八八五年、貿易不振の原因に関する大調査会が設けられるにいたったが、その結果うち出されたものは新興ドイツ帝国の世界市場における驚異的進出であり、イギリス産業の内部的欠陥であった。しかも他方において、大英帝国を讃美する思想的潮流は高揚し、熱狂的歓迎をうけるにいたった。それは一転して政治的主張にまで結晶し、『帝国連合』(Imperial Federation) の提唱は軍事同盟から関税同盟の要望へと発展する。たとえただちに現実化しなかったとしても、イギリス資本主義の経済的行詰りが、対外的な支配と膨脹に活路を求めてやまなかった時勢の変化にわれわれは目を蔽うことができない。それは単なる標語の問題ではなかったとおもう。

第一、帝国主義的膨脹は、国際法上の宣戦布告を必ずしも必要とするものではない。軍隊による武力を行使するかどうかも本質的な問題ではない。最初から政府が主体となって対外活動を開始することも、あえて必要とはしない。個人や特許会社を先駆として行われる植民地形成の歴史は、いたるところにある。一例として一九世紀末における列強のアフリカ侵略を振りかえって見るがいい。

リビングストーンやスタンリーの探険が何を目的としたかに論なく、ひとたび新大陸の発見が伝わるや、ドイツ、フランス、イタリアなどの諸国は、さきを争って植民地の経営に乗りだした。これに比べると、イギリスの出足が遅かったことは、たしかである。しかしイギリスは旧式な特許会社制度を巧みに利用した。それは調査や創業の経費を資本主義的企業家に負担させた方が、政府みずから手をだすよりも遙かに有利であり、まんいち事業が失敗したら棄てて顧みず、成功したら成功したで政府が肩替りすることもできるからだ。『神がイギリス外務省を困惑させるために創造した』とまでいわれるアフリカ大陸は、このような手口でいたるところイギリスの支配下におかれるようになった。われわれはここにイギリスの帝国主義的膨脹の一例を見出す。しかしシュンペーターは、こういう歴史的事実を少くも採りあげようとはしない。一つには帝国主義にかんする彼独得の定義づけから来るのかもしれないが、第三者の目には不可解な沈黙としか映じないであろう。

第三、イギリス社会主義と帝国主義との関係についてである。ハイエクはその著『隷従への道』(F. A. Hayek, *The Road to Serfdom*, 1953 p. 106 一谷藤一郎訳『隷従への道』昭和二九年、一八八ページ)のなかで、社会主義的計画論者が、一般に認められているより遙かに多くの『国家主義的性向と帝国主義的性向をともどもにもっている』ことを指摘し、それはとりわけウェッブ夫妻やその他初期のフェビアン社会主義者の場合に最も明瞭に認められると述

べ、彼らの計画化に対する熱情には、『強大国に対する尊敬と弱小国に対する軽蔑とが特に顕著に結びついていた』ことを強調している。またフランスの歴史家エリー・アレビーの語るところによると、ブーア戦争の際に、イギリスの進歩的な自由主義者や労働党をつくりはじめていた人々は、いずれも自由と人道の名のもとに、イギリスの帝国主義に抵抗して、ブーア人の肩をもち、味方となったけれども、ウェッブ夫妻やバーナード・ショーはそれに同じようとしなかった、という。彼らは明かに帝国主義的であった、とアレビーはきめつけるのである（*Elie Halévy, Imperialism and the Rise of Labour, Translated from the French by E. I. Watkin. Second Edition* 1951 p. 105.）。こうした事例から割り出すと、社会主義者の中にすら帝国主義に同調するものはいくらもありうるといえそうだし、また社会主義は必ずしも反帝国主義に通ずるとはかぎらぬということにもなりかねない。われわれのもっと掘り下げなければならぬ問題が、ここにあるのではないか。そしてそれは、社会的帝国主義の問題とも密接につながるものであろう。

五

シュンペーターが病に倒れたのは一九五〇年のことである。帝国主義に関する主論文を発表してから、その間ざっと三〇年あまりの歳月が流れているわけだが、右の期間に彼が世に問うた労作は数かぎりもなく多い。なかんずくアメリカに渡ってから書いた『景気循環論』（*Business Cycle.* 1936）二巻および『資本主義・社会主義・民主主義』（*Capitalism, Socialism and Democracy.* 1943）はその代表的なものといってよかろう。死後に発表された遺著『経済分析の歴史』（*History of Economic Analysis.* 1954）を読むものは誰でも、いかにシュンペーターが晩年にいたるまで

仔々として撓みなき精進をつづけたかを知ると同時に、驚歎と敬意を惜しまないにちがいない。

『帝国主義の社会学』は、それが第一次大戦のさなかに書かれたものであるに拘らず、否それが第一次大戦のさなかに書かれたものであるだけに、第一次大戦となって現われた帝国主義の分析を欠いている。が、これは卒直にいっていささか物足りぬ感銘を与えることは否みがたい。第一次大戦後においても、世界史は幾多の帝国主義の素材を提供した。ヴェルサイユ条約による戦後処理、ナチス・ドイツの擡頭と欧洲広域経済の建設、満洲事変・中日事変の勃発と東亜共栄圏の樹立、これらを前奏とする第二次大戦の発生、戦後における冷戦の現実、等々。これらの歴史的事件についてシュンペーターはいかなる見解を把持していたであろうか。絶えず前進をつづけてやまない創造的頭脳の持主が、新しく生起した多くの歴史的事件を直視しながら、依然として三〇年以前の旧説を墨守し、何ら動揺を感じなかったであろうか。われわれは後続の業績を点検して、彼に対するよりよき理解を獲得したいとおもう。

第二次大戦の最中に書かれた晩年の労作『資本主義・社会主義・民主主義』の中で、シュンペーターは帝国主義の新しい定義を与えている。『帝国主義とは一つの政府の支配を、国民性を同じくする団体いがいの他の団体に彼等の意思に反して拡張することを目的とする政策である。　これはロシアが〔第二次大〕戦前に外蒙古やフィンランドの場合に実行したところであり、戦時および戦後においては、あらゆる場合に実行したところである』（第二八章）。右の定義をわれわれの言葉にもういちど意訳するならば、国境を越えて他民族に対する政治的支配を暴力的に拡大するということになろう。一見したところ、きわめて平明であり、通俗的な定義であって、別に新奇な何ものも含むものではない。われわれは想い起す。　ホブソンが帝国主義を『それ〔国家〕の自然的堤防から氾濫して、反抗的

かつ非同化的な国民の遠近の領土を併合しようとするもろもろの企図によってもたらされた純粋なナショナリズムの変質』(J. A. Hobson: *Imperialism. A study*, 1902. Introduction. 石沢新二訳『帝国主義論』昭和五年　緒論、矢内原忠雄訳『帝国主義論』上巻　昭和二六年)と特徴づけたことを。

シュンペーターは、彼の新しい定義にわざわざ註釈を施している。いわく、『重要な点は、この政策が何ら固有の限界を知らぬということである。動機に関するいろいろな言いまわしは、すべて重要でない』(同上)と。すなわち、ここでは無際限の膨脹という点に強調がおかれているのであって、かつての『無目的』という規定は、影をひそめたかのように見える。それだけ彼の特色はうすれたかに感じられるけれども、さりとて根本的に変ったと推定しうる理由はどこにもない。彼はみずからこの定義が不十分である旨を明記しているばかりでなく、さしあたっての限定された目的に役立つかぎりにおいて採用する、と断っている。帝国主義の本質把握に関するかぎり、シュンペーターの旧来の考は、晩年におよんでもなお依然として彼の頭脳を支配していたものと想定して別にさしつかえはあるまい。

つねに活動的で休息を知らなかったシュンペーターは、いつも新しい素材を蒐集し、これに克明な分析を加えて、清新な知見と洞察を導きだすのが慣例であった、と伝えられている。そういう彼が晩年にいたっても三〇年あまり前に発表した帝国主義に関する自説の殻を頑強に固執し、一歩もその外に踏みださなかったと解してよいものだろうか。否、幸か不幸か、われわれは等閑に附すことをえない反証を与えられているのだ。一九三六年に発表された『景気循環論』第二巻のなかにある脚註が、あからさまにそのことをぶちまけている。『マルクス主義的な帝国主義理論(バウエル、ヒルファーディング)は……〔第一次大〕戦前の帝国主義を、トラスト化した資本主義の諸条件から

発生したものとして解釈しようとした。この説明は原理の上で統一性を保っていて、分析的な性向をもった人には誰にも、大きな魅力をもっていたことはもちろんであり、また戦後のファシズムの時期にまでわたって一般化することもできるであろう。この説明がなぜ不適当であるかの理由をここで解き明すことはできないが、現在の筆者にマルクス主義の理論よりも、あるいはまた筆者自身のかつての理論〔すなわち一九一九年の論文において展開された理論〕よりも真実に近いようにおもわれる見解は、カール・レンナーの社会的帝国主義の概念のなかにその片鱗（A glimpse）が体現されている』（六九六頁）。

以上の引用句はいろいろの点でわれわれに問題を提示している。前半はマルクス主義的帝国主義論に関するものであるが、それはバウエルやヒルファーディング等いわゆるアウストロ・マルクシストの理論であって、レーニンはシュンペーターの念頭にはいっていないことが注目される。主論文の発表された当時においては、まだレーニンの帝国主義論がドイツに伝っていなかったけれども、一九三六年には一般に流布し、当然にシュンペーターも知っていた筈である。このレーニンに対する黙殺は、一九四六年に出版された『資本主義・社会主義・民主主義』に関しても同様である。ことによるとシュンペーターはレーニンをあまり高く評価しなかったのかもしれない。

つぎに注意すべきは、上述の意味におけるマルクス主義的帝国主義論に対して、シュンペーターは最初から最後まで、つまり生涯を通じてつねに批判的であり、否定的な立場を堅持したに拘らず、いま問題とする前記の脚註によると、マルクス主義的帝国主義論はそれなりに第一次大戦後のファシズムに対しても適用可能の理論構造をもつこと、そしてそのために一部の読者にとって魅力的であることを認めているということである。『景気循環論』が出た当時は、ナチスの全盛時代であった。遠くアメリカに去っても、なおかつドイツ問題に関心を失わなかったで

あろうシュンペーターは、ファシズムと帝国主義の関係についてどのように考えていたのであろうか。

六

さて、もとに戻ろう。さきに掲げた『景気循環論』の脚註の後半は、明かにシュンペーターの心境の動揺を語るものである。けれども、それが何を契機として起ったのか、また新しい理論がどんな構想を内容とするかは、容易にわれわれの窮知を許さない。念のため、この点をもう少し詮索してみよう。

引用文のなかに出てくるカール・レンナーは、いうまでもなくアウストロ・マキシスト陣営の理論家として著名な人であるが、帝国主義に関する考えはだいたいバウエル、ヒルファーデングの線に属し、いわば亜流の一人といってよい。ところでシュンペーターがレンナーのいかなる著書をさしているかは明かでないけれども、おそらく『マルクス主義・戦争およびインターナショナル』(Karl Renner: *Marxismus, Krieg und Internationale.* 1917) を念頭においたものと想定することは、さしたる無理なしに許されるであろう。現に同書の第三部第二篇は『社会主義的帝国主義か』と題し、その第三章は『社会的帝国主義の誤謬』を取扱っているからだ。ここに社会主義的帝国主義とか社会的帝国主義とかの名称で呼ばれる代物は、当時の社会民主党内における右派の人々の理論なのであって、ひっきょうはドイツ帝国主義の弁護論にほかならぬ。レンナーはむろんこれと反対の立場にたつ。

右に掲げたレンナーの書物は、一九一七年に出版されたものであるから、シュンペーターが『帝国主義の社会学』を執筆したさい、参照しようとおもえば、参照するだけの便宜は十分あつたはずである。しかし参照したかどうかは、もちろんさだかでない。ただわれわれにとって非常に興味のあるのは、シュンペーターが彼の論文の脚註

の中で『社会的帝国主義』に言及しており、しかもそれをまっこうから否定している、という事実である。彼は書いている、『企業者やその他の連中が労働者に社会的厚生施設を与えて労働者の機嫌をとる――そのためには輸出独占主義が成功することが必要だと考えられる――ときの帝国主義は、これを「社会的帝国主義」と呼ぶことができよう。この言葉は実情にあてはまるとはいえ、いうまでもなく、労働者階級の帝国主義などといったものではない。労働者階級に根底をもった帝国主義という意味での「社会的帝国主義」なるものは存在しない。もっとも一部の労働者が煽動に躍らされて、一時的にそのような気持をもたされることは、むろんありうることだが。労働者の帝国主義的利益という意味での「社会的帝国主義」、さらにいいかえれば、労働者の利益に合せてとられる帝国主義的改革などというものは、無意味である。民衆の帝国主義ということは、今日ではありえないことである』（第五節註一三）。

ここで語られていることは、いろいろな意味でわれわれの注意を喚起するに十分である。シュンペーターの所説を敷衍するならば、労働者の大多数のものが帝国主義に積極的な関心をもたず、したがって継続的な支持を与えようとしないこと、諸国民のあいだには緊密な利害関係が成立しており、それが戦争を阻止する効果を発揮すること、戦争によって利得をうけるものは上層階級のほんの一部にすぎないこと、国民ぜんたいの心を捉える人民帝国主義なるものは、古代にはあったとしても、現代には存在しないことと、等々。

シュンペーターの本来の考が右のとおりだとすると、『景気循環論』の中で彼がほのめかした告白は、晩年のシュンペーターが自説に修正を加える必要を感じていたことを語るものと解釈しなければならぬ。しかし、その後に公刊された『資本主義・社会主義・民主主義』の中で、シュンペーターは彼の意味するマルクス主義的帝国主義論

にかなりのページを割き、持ち前の高踏的な態度で無遠慮な論評を加えているに拘らず、これぞといって目新しい自己の積極的な理論を展開してはいないのである。われわれはいったいシュンペーターの告白をどのように評価したらよいか、まったくもって途方にくれるほかはない。英訳本に長い解説文を書いたスウィージーも同じ悩みをうったえている。『わたしはシュンペーターのこの言葉にどの程度の意義を附すべきか、はっきりした結論に到達することができなかった』(J. A. Schumpeter, *Imperialism and Social Classes*, Translated by *H. Norden*. 1951 p. xvi.) 都留重人訳『シュンペーター、帝国主義と社会階級』昭和三一年　一一頁)と。彼はさらに言葉をつづけていう『わたしはレンナーが紹介しているところの、帝国主義的拡張によって労働者階級が直接的な経済的利益をえるという素朴な理論が、シュンペーターの心を捉えたとは、とうてい思われない。わたしの想像では、シュンペーターは「社会的帝国主義」という概念そのものの中に真実の「片鱗」を見たのであって、レンナーが意味しようとした内容が問題ではなかったようにおもう』(同上)と。まったく同感である。シュンペーターが語っているのは、一種の啓示をうけたというほどの意味であって、それ以上の何ものでもないであろう。

七

帝国主義の学説史的研究家として知られているウィンズローは、以前からシュンペーターの理論をもっとも高く評価するひとの一人であったが (E. M. Winslow, "Marxian, Liberal, and Sociological Theories of Imperialism", in *The Journal of Political Economy*. Vol. XXXIV. Nr. 6. Dec. 1931 p. 749)、戦後の労作である『帝国主義の類型』(*The Pattern of Imperialism*. 1948 p. 235-6.) の中で独得の解釈を述べている。『シュンペーターははっきりと言明すること

とを避けているけれども、この問題をつぎのようにとりあげるべきであると考えているらしい。すなわち、いわゆる合理的な目標が人間行為の動機となるのではなく、基本的な意志作用は、経済的（合理的）立場からすれば、合理性と関係がないか、または非合理的とおもわれるような衝動から発する、という点を認識するのが第一だというのである。もしもこれが経済的分野いがいのほとんどすべての人間行動の共通の特徴であるとするならば、戦おうとする意志や支配するという意欲は、昔流の職業的な軍人階級だけでなく、むしろその外に見出しうるという結論に達せざるをえない。そうだとすれば、民衆全体の一種の真の帝国主義、すなわちシュンペーターが古代の人々のあいだにのみ存在したと仮定したものに似通った人民帝国主義という概念を認める途がひらけてくる」と。こうしたウィンズローの補外延長は、彼とシュンペーターとのあいだにとりかわされた個人的な書簡を基礎とするものである。そしてウィンズローの著書はまだシュンペーターの存命中に刊行されたことをおもうと、相当の根拠あっての所業と解してよいであろう。スウィージーはウィンズローの提言を一笑に付して顧みないけれども、それはわれわれに考えさせる内容を含むもののようにわたしにはおもわれる。とりわけ人民帝国主義が古代にのみ限られるものではなく、現代においてすら起りうる可能性があるという見方は、興味ふかい。ナチスの擡頭はそのことを暗示するものでないかとさえおもう。

資本主義が高度の発展をとげ、民主主義が広汎に浸潤し、社会主義的政治勢力が政権の座についたあとに全体主義の名で呼ばれる新しい独裁政治、軍部ではなく民族社会主義を呼号する単一政党の支配、それにもとづく社会機構の再編成が新しい帝国主義としてヨーロッパ諸国を圧倒したという歴然たる事実、それは歴史の流れに逆行するかに見える驚くべき現象であった。シュンペーターはこれをどのように理解し、説明しようとしたであろうか。

それはもとより知るよしもない。しかし『景気循環論』が執筆された当時は、まさにナチスの興隆期であったことをおもうと、このドイツ・ファシズムが一般に投げかけた一連の疑問が、シュンペーターの心境に大きな波紋を捲き起したと仮定しても、あながち不自然な想像ではあるまい。

第一、ファシズムの温床である中産階級は、今日の資本主義社会における冷飯食いであり、いかなる意味においても権力の王座にたつものではない。資本主義社会の弱者であり、不安と動揺にさらされ、没落の淵にたたずむ彼等が、自己の運命を賭ける意気込みで、少くも当初はファシズムの熱烈な支持者となった。第二、ナチスのもとにあっては、階級闘争を旗印とする労働組合は解体され、新しくこれに代って労働戦線が結成された。それはもはや労使対等の資格における協調のための組織ですらなく、指導と服従をモットーとする上下の身分関係に再編成されたことを語るものにほかならぬ。第三、現代の総力戦とマス・コンミュニケーションの魔術は、国民の民族意識をたかめ、ひたすら戦争遂行の坩堝に身を投ぜしめる鉄壁の布陣を築きあげた。一部の反対分子が絶望的なレジスタンスを試みたとはいえ、弾圧の嵐の前に手も足も出ない始末であった。こうした挙国一致体制の確立は、人民帝国主義の構想と結びつく可能性をもつ。そう考えてくると、シュンペーターが自己の旧説に何らかの補整を加える必要を感じたであろう心境は、ある程度まで理解できるような気がする。

一九三〇年代のなかばから第二次大戦中にかけてシュンペーターがどんな精神生活を送っていたかについては、ハーバラーの回想が鮮かにその消息を語っている。『迫りくる嵐の時期と第二次大戦中の数年間シュンペーターは、ふたたびその政治的見解や信念のゆえに少数派たらざるをえなかった。第一次大戦中には、彼は親英的＝反ドイツ的で（もちろん政治的な意味で）あったが、第二次大戦中には親ドイツ的であるという印象を与えた。……彼の友

人の多くは、彼がヒトラー主義の危険や侵略の力と意図を過少評価しているというふうに考えた。彼はドイツが本当の不平をもっていること、ドイツは第一次大戦後、不当に取扱われてきたこと、そして極端な国家主義はそれに対する不幸な反応にほかならぬことを感じていた。けれども彼は、ドイツはそのままほうっておけば、結局は静かになるだろうと期待していた。……彼は反ドイツ（反ナチスとは別の）的な宣伝や政策に対しては強く反対する態度を示した』(S. E. Harris, *Schumpeter, Social Scientist*, 1951 pp. 37-38. 坂本二郎訳『社会科学者シュンペーター』昭和三〇年、一一〇—一一一ページ)。シュンペーターはナチスと何ら共通のものをもたない。彼はむしろナチスの弾圧をまっさきに浴びるべき運命の人であった。徹底的な平和主義者である彼は、ちょうど第一次大戦のみぎりドイツの侵略行為に憤りを示したと同じように、ナチスの目にあまる横紙破りを苦々しく思っていたに相違ない。けれどもそれは一時の反動的現象であって、歴史の車輪はやがて本来の軌道をたどるものだという見通しをたてていたのであろう。つねに長期的な観察を重んずる傾向の強かったシュンペーターとしては、けだし当然のことであったかもしれない。

（本稿は昭和三十三年度文部省科学研究交付金機関研究による研究成果の一部である）